田 貝 遺 跡

― 診療所建設工事に伴う緊急発掘調査報告書 ―

２０１７．３

三浦　達雄

盛岡市教育委員会

田 貝 遺 跡

― 診療所建設工事に伴う緊急発掘調査報告書 ―

２０１７．３

三浦　達雄

盛岡市教育委員会

例　　言

1．本書は，岩手県盛岡市上鹿妻田貝11番１外に所在する田貝遺跡の発掘調査報告書である。
田貝遺跡第16次調査にかかる野外調査は，平成28年４月４日から４月26日まで実施し，調査面積は743㎡である。室内整理作業は平成28年５月９日から平成28年６月30日まで行った。

2．本調査は，事業主である三浦達雄氏（みうら産婦人科内科医院　医院長）と盛岡市教育委員会との間に締結された協定書に基づき，盛岡市遺跡の学び館が野外調査，出土資料整理及び報告書編集を実施した。本調査にかかる費用は，事業主体者である三浦達雄氏から支出された。

3．本書は遺構及び遺物の実測図などの資料呈示を意図して，執筆編集は花井正香が担当し，菊地幸裕，室野秀文，津嶋知弘，神原雄一郎，佐々木亮二，鈴木俊輝，及川栞里，今松佑太が協力した。

4．遺構の平面位置は，過去の調査との整合性のため，日本測地系を用い，平面直角座標第Ⅹ系を座標変換した調査座標で表示した。なお，方位は座標北を表している。

調査座標原点　　X－35,000.000（世界測地系　－34,692.299）＝　RX±0.000
　　Y＋23,700.000（世界測地系　＋23,400.449）＝　RY±0.000

5．高さは標高値をそのまま使用している。

6．土層図は堆積のあり方を重視し，線の太さを使いわけた。土層註記は層理ごとに本文でふれ，個々の層位については割愛した。なお，層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（2013小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業㈱発行）を参考にした。

7．遺構の名称及び記号は次のとおりである。

遺　構	記号	土　坑	RD	溝　跡	RG

8．使用した地図は国土交通省国土地理院発行の５万分の1「盛岡」「日詰」の地形図である。

9．発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は，盛岡市遺跡の学び館で保管してある。

10．調査体制

［調査主体］盛岡市教育委員会　教育長　千葉仁一　　教育部長　豊岡勝敏　　教育次長　中野玲子
［調査総括］歴史文化課　遺跡の学び館　　課長兼館長　杉本　浩　　館長補佐　北田牧子
［調　　査］副主幹　菊地幸裕　　文化財主査　室野秀文　　文化財主査　津嶋知弘
文化財主査　神原雄一郎　　文化財主査　花井正香（※調査・資料整理）
文化財主任　佐々木亮二　　文化財主事　鈴木俊輝
文化財調査員　及川栞里（※調査）　　文化財調査員　今松佑太

［発掘調査・室内整理作業］（五十音順，敬称略）
阿部真紀子，阿部有子，天沼芳子，伊藤敬子，長内理恵，熊谷あさ子，小松愛子，
佐藤公一，谷藤貴子，千葉智子，山田聖子

［御指導・御協力］
岩手県教育委員会，公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
三浦達雄，みうら産婦人科内科医院，株式会社アトリエノルド

目　　次

例　　言
目　　次
表　目　次
挿　図　目　次
写真図版目次

Ⅰ．遺跡の環境
　1．地理的環境 …… 1
　2．歴史的環境 …… 3
Ⅱ．調査内容
　1．これまでの調査 …… 4
　2．調査経過 …… 4
　3．遺跡の基本層序と遺構検出状況 …… 9
　4．検出された遺構と遺物
　（1）縄文時代の遺構・遺物 …… 9
　（2）古代以降の遺構 …… 13
Ⅲ．調査のまとめ …… 17

表　目　次

第1表　田貝遺跡調査成果一覧 …… 4

挿　図　目　次

第1図　田貝遺跡位置図（1：50,000） …… 1
第2図　地形分類と周辺の遺跡分布 …… 2
第3図　田貝遺跡全体図（1：2,000） …… 5
第4図　田貝遺跡第16次調査全体図 …… 7
第5図　ＲＤ001～005土坑 …… 10
第6図　ＲＧ003溝跡 …… 14
第7図　ピット土層断面，ＲＤ001土坑，ＲＧ003溝跡，遺構外出土遺物 …… 16

写真図版目次

第１図版　第16次調査区全景
第２図版　第16次調査区及び志波城古代公園遠景，ＲＤ001土坑注口土器出土状況
第３図版　ＲＤ001土坑遺物出土状況，ＲＤ001土坑全景，ＲＤ002～004土坑全景，ＲＤ005土坑全景
第４図版　ＲＧ003溝跡全景，ＲＧ003溝跡土層断面①～③，調査風景
第５図版　ＲＤ001土坑出土遺物，ＲＤ001土坑出土注口土器
第６図版　ＲＤ001土坑出土剥片，ＲＧ003溝跡，遺構外出土縄文土器

《遺物の表現について》

（１）土器

ａ．縄文土器の実測図・拓本は1/3スケールとした。

ｂ．挿図の土器配列については，器種・器形・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。

（２）挿図中の記号・番号は遺物の出土位置及び出土層位を表している。

（例）ＲＤ871　Ｃ層　　→ＲＤ871土坑内埋土Ｃ層より出土

（例）Ｈ２－Ｔ５　Ⅵ層

↓　↓　↓

※１　※２　※３

※１　調査座標原点ＲＸ±０　ＲＹ±０を起点として，Ｘ・Ｙ両軸を50m毎に区切る大グリッドを設定し，Ｘ軸線上を西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…Ｗ・Ｘ・Ｙ，Ｙ軸線上を北から南へ１・２・３…23・24・25と付し，北西隅のこれらのアルファベットとアラビア数字の組合せを，大グリッドと呼称した（第３・４図）。

※２　大グリッドを２ｍ毎に細分割し，小グリッドを設定し大グリッドの呼称を再び用いた。よって，大グリッド－小グリッドという組合せで，遺物の平面出土地点を２ｍごとに表示した。

※３　遺物の出土層位を表している。

《遺構の表現について》

遺構の挿図中，説明する当該遺構については，実線で表現した。

Ⅰ　遺跡の環境

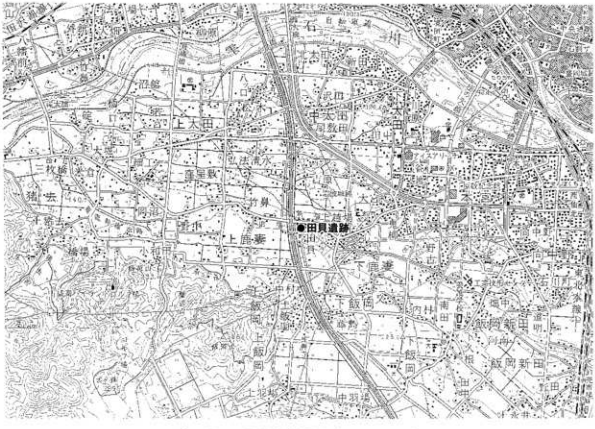
1．地理的環境

遺跡の位置　田貝遺跡は，盛岡市街地より南西約3.5kmの盛岡市上鹿妻字田貝地内に所在する（第１図）。国指定史跡志波城跡外郭南辺の南に隣接し，現況は宅地や水田・畑・果樹園などの農地が主体となっている。遺跡の範囲は東西約550m，南北約270mと推定され，標高は131m前後である（第３図）。

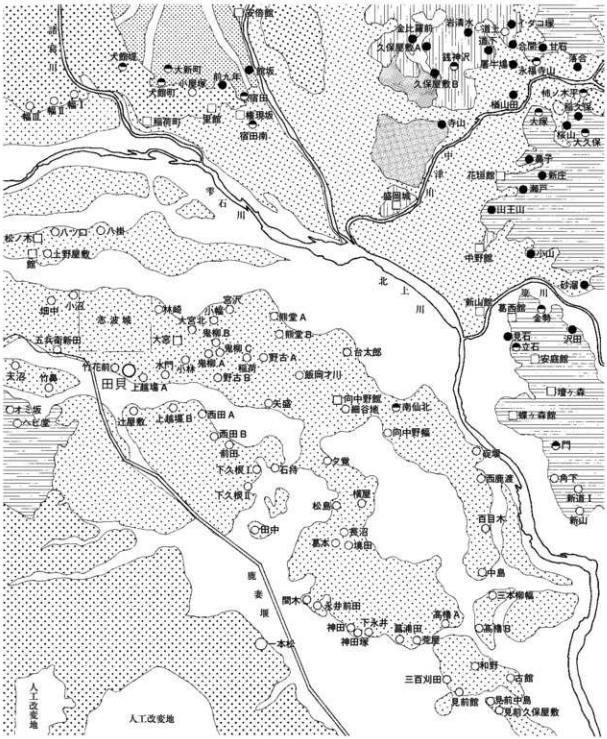
地形・地質　盛岡市は東に北上山地，西に奥羽山脈を擁し，北西には岩手山（2,038m）を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は，構成する地質やその形成年代が異なるため，東西の地形の様相は大きく異なる。また，岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地形・地質に大きく影響を及ぼしている。

雫石川は奥羽山脈より東流し，その流れは烏泊山と箱ヶ森に挟まれた北の浦（市内上太田）で急激に挟められ，その狭窄部を抜けて北上川と合流する。雫石川はこれまでに何度も流路を変えており，雫石川南岸に広がる沖積段丘の形成に大きな影響を及ぼしている。田貝遺跡はその沖積段丘上に立地している（第２図）。

この沖積段丘は，水成砂礫層を基底とし，その上層に水成シルト，さらに表土が覆っている。このシルト層は旧河道などの低地形ばかりでなく，微高地上にも堆積している。これは沖積段丘が，河道の定まらない雫石川の下刻が周辺山地からもたらす砂礫やシルトによって形成され，何度も堆積が繰り返されたことによるものである。雫石川の旧河道は幾筋も確認されており，大きなものは４条，そのほかにも網目状に細かな旧河道が沖積段丘に広がっている。それらに画された微高地上に古代を中心とした遺跡が点在している。



第１図　田貝遺跡位置図（１：50,000）



第２図　地形分類と周辺の遺跡分布

２．歴史的環境

周辺の遺跡　本遺跡の立地する沖積段丘上では，古墳時代末～平安時代を中心とする遺跡が多く分布する一方，縄文時代～弥生時代にかけての遺構・遺物の発見は少ない。

縄文～弥生　確認例は少ないが，本遺跡で旧河道に堆積した縄文時代晩期の遺物包含層，南東に隣接する石仏遺跡では焼土遺構とそれに伴う多量の縄文時代後期の遺物が出土しているほか，東に隣接する新堰端遺跡からは縄文時代の陥し穴や縄文時代晩期の埋設土器が確認されている。

古　　代　古墳時代末，７世紀前半の遺構・遺物は少ないが，竹鼻遺跡で確認されている。本遺跡南南東約１kmの飯岡山東麓には終末期古墳の高館古墳群が，西方約２kmには奈良時代，８世紀代の終末期古墳である太田蝦夷森古墳群が所在する。同時代の集落遺跡として，志波城跡内の吉原地区，八卦遺跡，竹鼻遺跡，台太郎遺跡，百目木遺跡など多数の集落が増加する傾向にある。この時期の集落は，大型竪穴建物跡を中心としてその周囲に小～中型の竪穴建物跡が数棟ずつまとまりをもって分布する傾向がある。大型竪穴建物跡に玉類や紡錘車が偏在してみられ，家父長制的なムラを構成していたと考えられる。９世紀，平安時代初頭の延暦22年(803)には，本遺跡の北に「志波城」（下太田方八丁他）が造営される。志波城は東北経営のために朝廷が造営した古代城柵であり，当時「蝦夷(エミシ)」と呼ばれていた人々の社会に大きな影響を与えたと考えられる。征夷大将軍であった坂上田村麻呂が朝廷の命を受け造営した志波城は，北側を流れる雫石川の度重なる洪水の被害を受け，およそ10年で文室綿麻呂の建議により徳丹城（矢巾町西徳田）に移転したことが記録に見られる。その後，徳丹城は９世紀中葉までにはその機能を停止し，本地域も含む北上盆地一帯は，鎮守府胆沢城(奥州市水沢区九蔵田）による一城統治の体制となる。以降，９世紀中葉から本地域では竪穴建物跡を主体とした集落数が増加の一途をたどる。それにともない竪穴建物跡の規模の大小差は縮小するようになり，重複が著しく見られるようになる傾向がある。その中でも，向中野館遺跡の低湿地から古代の祭祀に関係すると考えられる遺物の出土や，飯岡沢田遺跡・飯岡才川遺跡の円形周溝墓群や火葬骨蔵器など，本地域内の集落機能の分化もみられる。また，９世紀後葉から10世紀中葉にかけては，地区の拠点的な集落も姿を現す。細谷地遺跡では，微高地の南斜面に沿うように２×２間の総柱の掘立柱建物跡が東西に並立し，倉庫群が存在したと考えられる。また大宮北遺跡や，志波城跡の北東に隣接する林崎遺跡で，規模の大きな官衙的な掘立柱建物を計画的に配置した集落も発見されており，在地有力者の拠点と考えられる。

中　　世　11～12世紀にかけての，様相ははっきりしないが，12世紀末～13世紀初頭頃のものと考えられるかわらけが，大宮遺跡の大溝跡から多量に出土している。13世紀後半には，台太郎遺跡で不整長方形の平面形となる居館が営まれ，地域を支配した豪族の存在が想定される。さらに同遺跡では，土坑墓群や宗教施設と考えられる遺構も検出されており，出土遺物から15世紀頃までの存続が考えられる。また向中野館遺跡や矢盛遺跡でも，堀跡が検出されており，出土遺物やその平面形から16世紀代を中心とする居館と考えられている。戦国時代，本遺跡南東の飯岡山にはこの地域を治めた飯岡氏が居住した飯岡館が築かれる。

近　　世　江戸時代には，雫石川は現在の流路となり，旧河道の東側には奥州道中（街道）や仙北組丁が開かれ，本地域は水田地帯に農家が点在する農村地帯となる。この姿は現在の本地域の様子と大きく違いが無いものと考えられる。

Ⅱ　調査内容

1．これまでの調査

本遺跡は，昭和63年度に第１次調査が実施され，個人住宅建築，農作業用建物建築や下水道管敷設が主体を占め，以後平成28年度で16次にわたって調査されている（第３図）。これまでの発掘調査により，遺跡北部には志波城外郭築地線と並走するＳＤ001大溝跡が確認され（第１・２・９・11・12次調査），志波城付属の区画施設と想定されている。この大溝跡は本遺跡の東に隣接する新堰端遺跡でも確認されている。また，遺跡中央部に位置する第５次調査では，旧河道内に形成された縄文時代晩期の遺物包含層が検出されている。本調査区に隣接する新堰端遺跡第１次調査では縄文時代晩期前葉の埋設土器，縄文時代の陥し穴状土坑及び貯蔵穴，平安時代の竪穴建物跡等が確認されている。遺跡南部では平安時代の竪穴建物跡３棟が調査され，古代の集落の広がりが考えられる（第14次調査）。

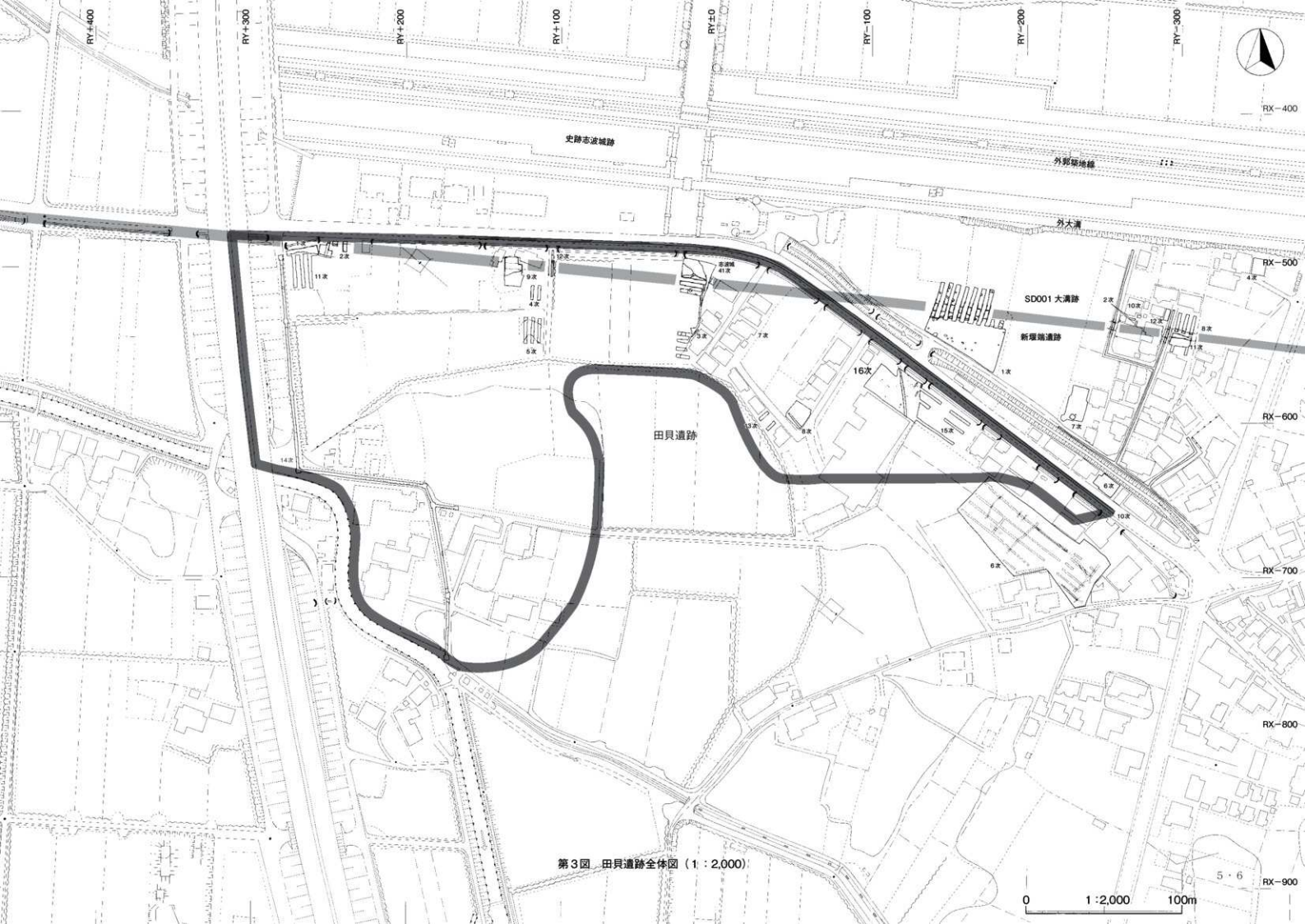
次数	所在地	調査原因	面積(㎡)	期間	検出遺構・遺物
1	上鹿妻田貝71－4	個人住宅建築	215	1988.5.6－5.11	平安時代大溝跡1，縄文土器・土師器破片
2	上鹿妻田貝71－1	農作業小屋建築	55	1989.4.17－4.26	平安時代大溝跡1，縄文土器・土師器破片
3試掘	上鹿妻田貝19－5	個人住宅増築	5	1989.4.19	遺構・遺物なし
4試掘	上鹿妻田貝62	農作業小屋建築	32	1994.4.12－4.13	遺構・遺物なし
5	上鹿妻田貝100－2の一部	個人住宅建築	98	1995.6.7－6.19	縄文時代晩期遺物包含層，旧河道
6試掘	上鹿妻田貝8－4，5	農業施設建築	383	1995.12.4－12.5	古代溝跡9
7試掘	上鹿妻田貝17－12	個人住宅建築	－	1996.7.20	遺構・遺物なし
8試掘	上鹿妻田貝14－2	個人住宅建築	176	1998.7.27－7.29	中世以降溝跡1
9	上鹿妻田貝59－2	個人住宅建築	189	2001.5.1－5.11	平安時代大溝跡1
10試掘	上鹿妻田貝地内	下水管埋設	307	2007.11.6－11.13	遺構・遺物なし
11試掘	上鹿妻田貝71－1	作業場建築	18	2007.11.7	平安時代大溝跡1
12	上鹿妻田貝地内	下水管埋設	17	2008.10.9	平安時代大溝跡1
13試掘	上鹿妻田貝20－4	個人住宅建築	30	2009.4.28	遺構・遺物なし
14	上鹿妻田貝40－1～71－4	下水管埋設	363	2009.9.7－12.9	平安時代竪穴建物跡3，溝跡1
15試掘	上鹿妻田貝11－1 外	診療所建設	169	2015.9.17－9.18	古代溝跡1，土坑2，剥片
16	上鹿妻田貝11－1 外	診療所建設	743	2016.4.4－4.26	縄文時代土坑3，平安時代溝跡1，土坑1，縄文土器，剥片

第１表　田貝遺跡調査成果一覧

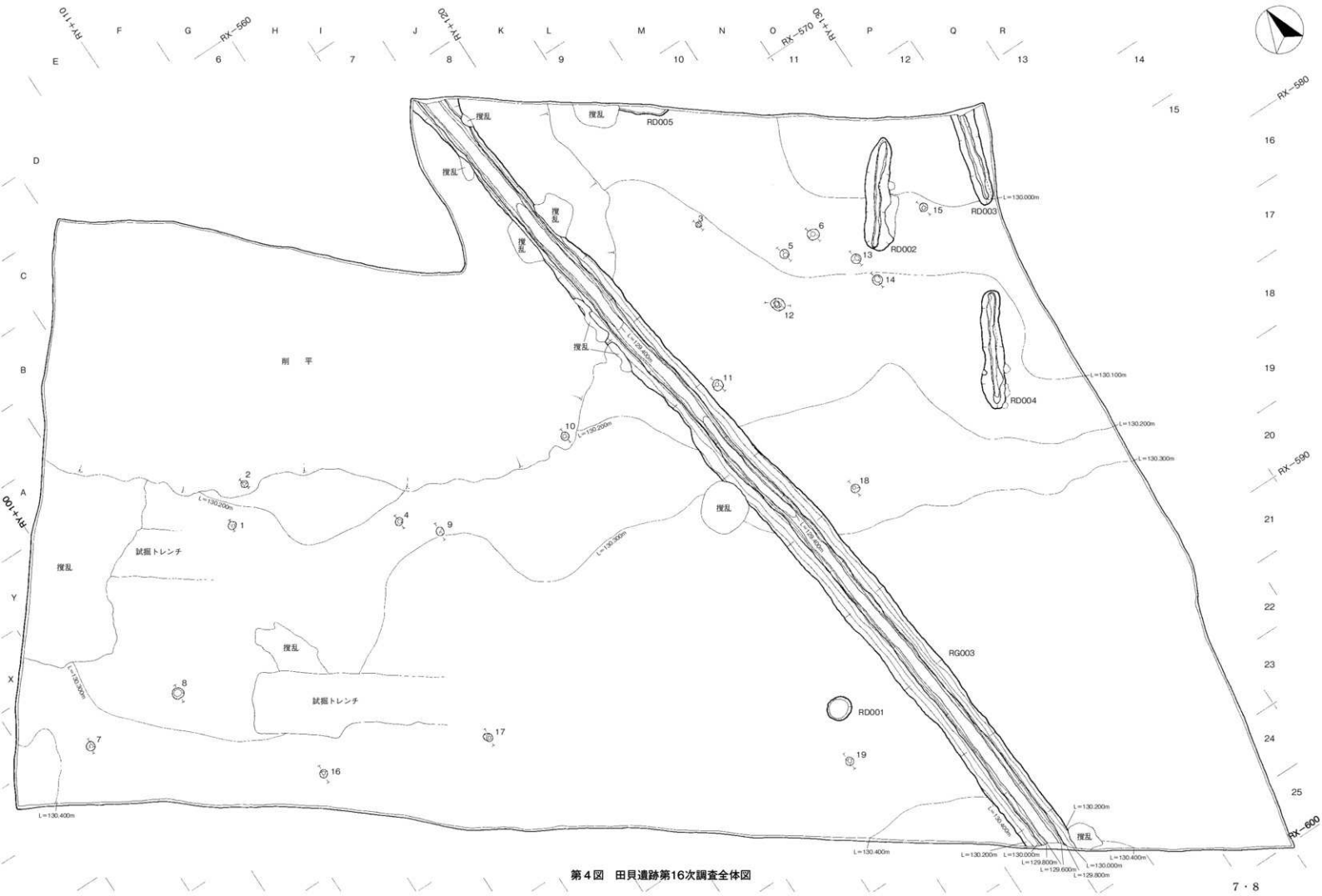
2．調査経過

試掘調査　平成27年７月，当市教育委員会において，当該地を含む上鹿妻田貝11番１外（開発面積約1,962㎡）について事業者　三浦達雄氏から診療所新築に関する事前協議が持たれた。この協議を受け，平成27年９月17・18日にかけて開発予定地内を試掘調査した結果（第15次調査），予定地内の西（診療所建設範囲）から古代以降の溝跡，時期不詳の土坑が検出されたことから，その範囲について工事着手前の緊急発掘調査が必要とされた。

発掘調査　当該地については，診療所建設工事として，平成28年２月４日付けで発掘届が提出され，平成28年４月１日，事業者　三浦達雄氏と当市教育委員会教育長との間で「埋蔵文化財に関する協定書」が締結された。遺跡の学び館が本調査を実施し，調査期間は平成28年４月４日～26日，調査面積は743㎡である。



第３図　田貝遺跡全体図（1：2,000）



第４図　田貝遺跡第16次調査全体図

３．遺跡の基本層位と遺構検出状況

田貝遺跡第16次調査区は，遺跡東部に位置し，過去の調査では第６次調査区の北と第８・13次調査の西である。また新環端遺跡第１次調査の南である。調査地の北部分は調査開始まで駐車場として使われ，盛土されている。それ以外は畑及び果樹園として使われていた。調査区内は南西側がやや高く，北東及び東方向に緩やかに傾斜する地形で，検出面の標高値は130.000～130.400ｍ前後である。

基本層序　調査区内で確認された基本層序は以下のⅠ～Ⅳ層に大別される。Ⅰ層はａ・ｂ層に細分され，Ⅰａ層は砕石，礫及び土による盛土である。Ⅰａ層の確認範囲は調査区内の北のみで，調査開始まで駐車場として使われていた。なお，駐車場整備時に後述するⅣ層まで削平を行っている。Ⅰｂ層は畑または果樹園の耕作土，Ⅱ層は縄文・古代遺物を極微量に含む黒褐色土層である。Ⅲ層は暗褐色～褐色シルト層（漸移層）である。Ⅳ層は褐色～黄褐色シルト層（地山）で，その上面が遺構検出面である。これより下部は低位段丘を構成する砂礫層（Ⅴ層）となり，本調査では確認していないが，周辺の調査事例からシルト層と砂礫層の互層となることが確認されている。

検出状況　過去の農地耕作や駐車場整備時に削平されており，盛土及び耕作土のⅠ層及びⅡ層を除去

検出遺構　したⅢ層上面で検出作業が行われた。検出された遺構は，縄文時代晩期の土坑１基（ＲＤ001），縄文時代の陥し穴状土坑３基（ＲＤ002～004），平安時代の溝跡１条（ＲＧ003），古代以降の土坑１基（ＲＤ005），ピット19口である（第４図）。

出土遺物の時代・時期は，縄文時代晩期前葉～中葉にかけての縄文土器，石器が主体で，古代の遺物は出土していない。遺物総数は収納コンテナ（54cm×34cm×15cm）1/3箱分である。

４．検出された遺構と遺物

（１）縄文時代の遺構・遺物

遺構検出状況（第４図）

今回の調査では縄文時代の土坑群が確認された。検出された遺構は土坑４基で，いずれも漸移層の暗褐色～褐色シルト層上面（Ⅲ層）で検出している。調査区南で単独で検出されたＲＤ001土坑は，人為堆積の埋土で，完形の注口土器や複数の剥片が出土した。その他のＲＤ002～004土坑は，調査区内で一番標高が低くなる東部でまとまって検出された。その平面形及び断面形から陥し穴として使用されたと考えられる。

ＲＤ００１土坑（第５図）

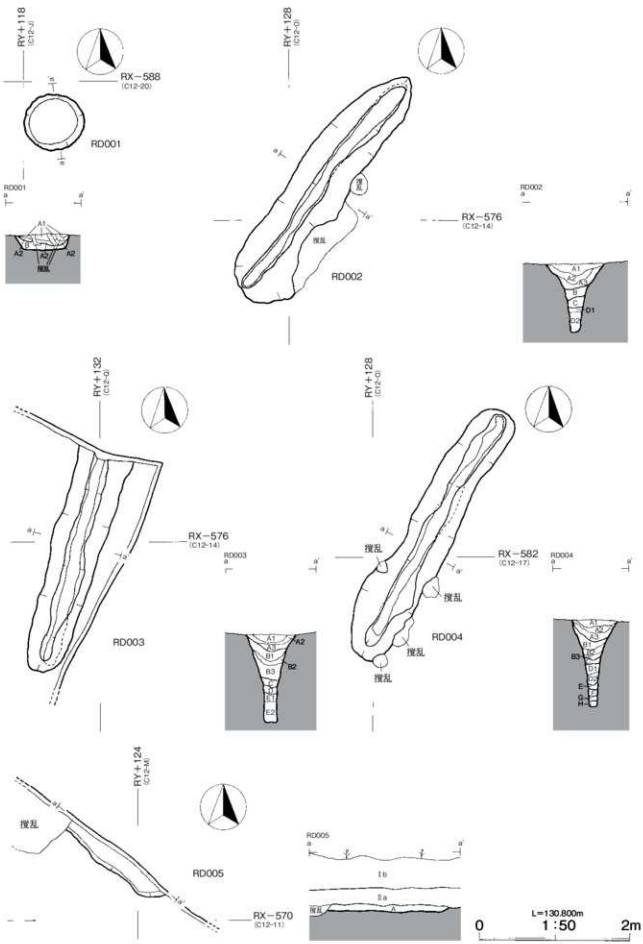
位　　置　調査区南（Ｃ12－Ｊ20区）　**平 面 形**　円形

規　　模　長軸－上端0.80ｍ，下端0.62ｍ，短軸－上端0.74ｍ，下端0.60ｍ

重複関係　なし　**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　Ⅲ層上面

埋　　土　人為堆積でＡ・Ｂ層に大別され，Ａ層はさらに２層に細分される。

Ａ層－暗褐色土を主体とする層で，A_1層は微量のカーボン粒と粉～粒状のにぶい黄褐色シル



第５図　RD001～005土坑

トを少量含み，A_2層は粒～小塊状の黄褐色シルトを含む。A_1層から正位の状態で完形の注口土器，$A_{1\cdot2}$層から頁岩製の剥片８点が出土している。

Ｂ層－褐色シルトを主体とし，小塊状の暗褐色土を含む。頁岩製の剥片４点が出土している。

壁の状態　検出面から底面までの深さは0.22mで，外傾して立ち上がる。

底の状態　ほぼ平坦である。

出土遺物（第７図１）　１は注口土器である。器形は口縁部が長く内傾し，体部は算盤玉状で丸底である。注口部直上の正面の口唇部には前立状の山形突起があり，その突起直下の口縁部には，正面で入り組む横位の三叉文と区画沈線１条，口縁部の中位にも横位の沈線１条が廻る。体部は無文であるが，注口部との接点に入組三叉文が施文される。器面全体を研磨し黒色に仕上げており，胎土に不純物の少ない精選された粘土を使用する。その他，頁岩製の剥片12点が出土している（写真図版：第５・６図版）。これらの剥片には剥離時の打撃調整は確認されるものの，使用痕は観察されない。

時　　期　縄文時代晩期前葉

ＲＤ００２土坑（第５図）

位　　置　調査区東（Ｃ12－Ｏ13・14区）　**平 面 形**　溝状　**長軸方向**　Ｎ40°Ｅ

規　　模　長軸－上端3.60m，中端3.42m，下端3.35m

短軸－上端0.75m，中端0.21m，下端0.15m

重複関係　なし　**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　Ⅲ層上面

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｄ層に大別され，Ａ層は３層，Ｄ層は２層に細分される。

Ａ層－黒色土を主体とし，A_1層は粒状の暗褐色土を微量，A_2層は粒～小塊状の黒褐色土，A_3層は小塊状の褐色シルトを多量含む。

Ｂ層－褐色シルトを主体とし，小塊状の暗褐色土を含む。

Ｃ層－黒褐色土を主体とし，小塊状の褐色シルトを多量含む。

Ｄ層－褐色シルトを主体とする層で，D_1層は粒状の暗褐色土を少量，D_2層は小塊状の黒褐色土を微量含む。

壁の状態　検出面から底面までの深さは0.90mで，上部は緩やかに外傾するが，その下は直壁である。

底の状態　ほぼ平坦である。　**出土遺物**　なし　**時　　期**　縄文時代

ＲＤ００３土坑（第５図）

位　　置　調査区東（Ｃ12－Ｐ13・14区）　**平 面 形**　溝状　**長軸方向**　Ｎ16°Ｅ

規　　模　長軸－上端2.93m以上，中端2.77m以上，下端2.80m以上（調査区外）

短軸－上端0.60m，中端0.28m，下端0.15m

重複関係　なし　**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　Ⅲ層上面

埋　　土　自然堆積でＡ～Ｅ層に大別され，Ａ・Ｂ層は３層，Ｅ層は２層に細分される。

Ａ層－黒色土を主体とし，暗褐色土を微量に含む。混入土の暗褐色土は，A_1層は極微量の粉状，A_2層は微量の粉状，A_3層は微量の粒状である。

Ｂ層－黒褐色土を主体とし，粒～塊状の褐色シルトを多量に含む。３層に細分され，下層ほど

褐色シルトの割合が高くなる。

C層－褐色シルトを主体とし，粒状の暗褐色土を微量含む。

D層－黒褐色土を主体とし，小塊状の褐色シルトを少量含む。

E層－褐色シルトを主体とする層で，E_1層は少量の暗褐色土粒を含み，E_2層は粒状の黒褐色土を多量含む。

壁の状態　検出面から底面までの深さは1.15mで，上部は緩やかに外傾するが，その下は直壁である。

底の状態　ほぼ平坦である。　**出土遺物**　なし　**時　期**　縄文時代

ＲＤ００４土坑（第５図）

位　置　調査区東（C12－O16・17区）　**平面形**　溝状　**長軸方向**　N30°E

規　模　長軸－上端3.75m，中端3.52m，下端3.30m

短軸－上端0.57m，中端0.19m，下端0.12m

重複関係　なし　**掘込面**　削平　**検出面**　Ⅲ層上面

埋　土　自然堆積でA～H層に大別され，A・B層は３層，D層は２層に細分される。

A層－黒色土を主体とする層で，粉状の暗褐色土を含む。暗褐色土の混入量は，$A_{1\cdot3}$層は極微量，A_2層は少量である。

B層－黒褐色土を主体とし，褐色シルトを含む。混入土の褐色シルトについては，$B_{1\cdot3}$層は粉～粒状を少量，B_2層は小塊状を多量含む。

C層－褐色シルトを主体とし，粒状のにぶい黄褐色シルトを微量含む。

D層－黒褐色土を主体とし，粒状の褐色シルトを少量含む。下層は褐色シルトの割合が多い。

E層－粉～粒状の黒褐色土を少量含む褐色シルト。

F層－塊状の暗褐色土を多量に含む黒褐色土。

G層－褐色シルトを主体とし，小塊状の黒褐色土を多量含む。

H層－黒色土を主体とし，粒状の暗褐色土を少量含む。

壁の状態　検出面から底面までの深さは1.16mで，上部は緩やかに外傾するが，その下は直壁である。

底の状態　ほぼ平坦である。　**出土遺物**　なし　**時　期**　縄文時代

遺構外出土遺物

調査区内のＲＧ003溝跡埋土やⅡ層から縄文時代の遺物が少量出土している。本遺跡の立地する沖積段丘上では縄文時代の遺構・遺物の発見は少ないが，第５次調査で旧河道に形成された縄文時代晩期を中心とする遺物包含層が確認されている。また隣接する新堰端遺跡第１次調査では，縄文時代晩期前葉の深鉢を倒立状態で埋設した埋設土器が１基確認されている。本調査で縄文土器の破片や石器の剥片が出土したのは，ＲＧ003溝跡であり，いずれも周辺からの流入とみられる。

出土遺物（第７図２～13）　２～５は縄文時代晩期前葉（大洞Ｂ式）に属する土器群である。２は台付鉢で，底部～台部である。底部付近の体部には一部ＲＬ単節縄文を横位に施す。台部は無文で，中位に１条の沈線が横位に施される。３・４は深鉢の口縁部で同一個体である。平縁で口縁下には横位の沈線が１条，横位のＬＲ単節縄文が施文される。５は小波状口縁で，波状間をヘラ状工具

で削ぎ落して小波状としている。口縁部～頸部には横位のＬＲ単節縄文，平行沈線５条をめぐらす。６は晩期中葉（大洞Ｃ２式）に属する鉢の体部である。沈線による直線的な雲形文，磨消縄文が施される。胎土に不純物の少ない精選された粘土を使用する。７～13は晩期に属する地文のみの深鉢である。７～11は体部で横位のＬＲ単節縄文が施文され，７・８・11は外面に輪積痕が観察される。12は平縁となる口縁部で，口唇部及び体部に横位のＬＲ単節縄文が施される。13は横位のＬＲ単節縄文が施文される平縁の口縁部である。この他，図示していないが，ＲＧ003溝跡から頁岩製の剥片３点が出土している。

（２）古代以降の遺構

遺構検出状況（第４図）

今回の調査では縄文時代の遺構とともに古代以降の土坑，溝跡，ピットが確認された。検出された遺構は平安時代の溝跡１条（ＲＧ003），古代以降の土坑１基（ＲＤ005），ピット19口で，いずれも漸移層の暗褐色～褐色シルト層上面（Ⅲ層）で検出している。調査区を南北に縦走するＲＧ003溝跡は，埋土中に志波城跡外郭の遺構から確認されている大規模洪水層と酷似した褐色～黄褐色シルトを主体とする水成堆積層が認められた。調査区北東で一部が検出されたＲＤ005土坑であるが，周辺の調査結果から竪穴建物跡や竪穴跡の可能性も考えられる。これらの遺構から土師器や須恵器などの古代以降の遺物は全く出土していない。

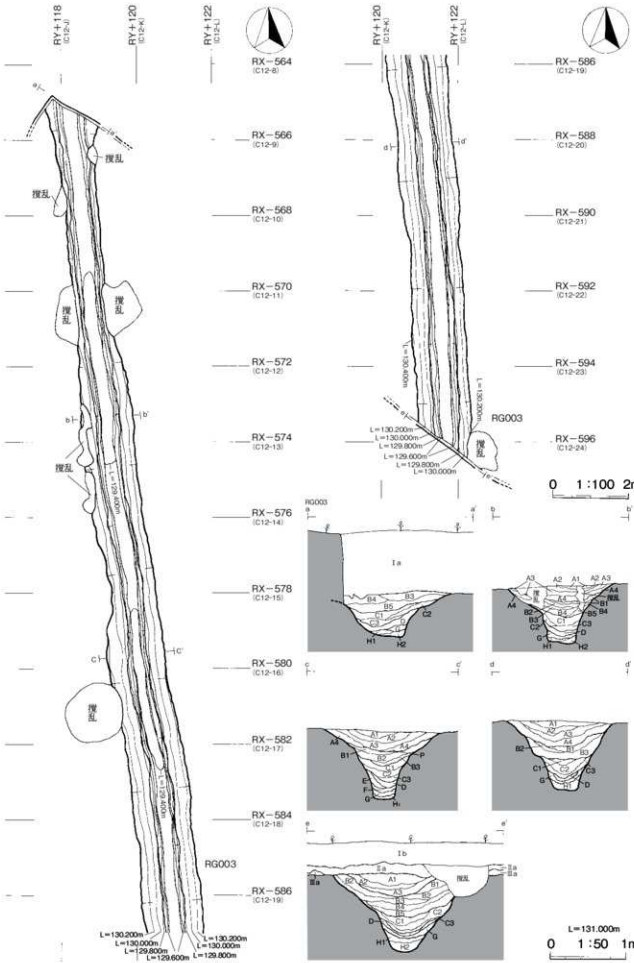
ＲＤ００５土坑（第５図）

位　　置　調査区北（Ｃ12－Ｌ・M10区）　**平 面 形**　不整楕円形か
規　　模　残存部長軸－上端1.55m，下端1.50m，短軸－上端0.21m以上，下端0.20m以上（調査区外）
重複関係　なし　**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　Ⅲ層上面
埋　　土　自然堆積で，黒褐色土を主体とし，粒状の暗褐色土を少量含む単層である。
壁の状態　検出面から底面までの深さは0.10mで，緩やかに外傾して立ち上がる。
底の状態　ほぼ平坦であるが，南東に向かって若干傾斜する。　**出土遺物**　なし
時　　期　古代以降

ＲＧ００３溝跡（第６図）

位　　置　調査区北～南
平 面 形　僅かに西に傾くが，南北方向にほぼ直線状にのびる（調査区外）。
規　　模　総延長30.70m以上，上端幅－0.90～1.55m，中端幅－0.47～0.80m，下端幅－0.25～0.40m
重複関係　なし　**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　Ⅲ層上面
埋　　土　自然堆積でＡ～Ｈ層に大別され，Ａ層は４層，Ｂ層は５層，Ｃ層は３層に細分される。Ｃ層以下はグライ化が観察され，下層ほどグライ化が進み，帙らかくなる。Ｅ・Ｆ層はＣ12－Ｋ19・20グリッド付近のみで確認されている。

Ａ層－黒褐色土を主体とする層で，$Ａ_{1・2}$層は粉～粒状の暗褐色土を微量，$Ａ_{3・4}$層は粒～小塊状の褐色シルトを多く含む。$Ａ_{5}$層はカーボン粒を僅かに含む。


RY+118
RY+120
RY+122
RX−564
RX−566
RX−568
RX−570
RX−572
RX−574
RX−576
RX−578
RX−580
RX−582
RX−584
RX−586
RX−588
RX−590
RX−592
RX−594
RX−596
RG003
覆乱
L=130.200m
L=130.000m
L=129.800m
L=129.600m
0 1:100 2m
L=131.000m
0 1:50 1m

第６図　RG003溝跡

B層－褐色または黄褐色シルトを含む，暗褐色土と黒褐色土の混合土。５層に細分され，$B_{1\cdot3}$層は粒～塊状の黄褐色シルトを多量，$B_{3\cdot4}$層は粉～粒状の褐色シルトを微量，B_5層は粒～塊状の褐色～黄褐色シルトを含む。またB_2層は微量のカーボン粒，B_5層はカーボン粒～小塊を少量含む。

C層－にぶい黄褐色シルトを主体とし，粒～小塊状の暗褐色土を微量～少量含む。３層に細分され，下層ほど暗褐色土の割合が少ない。水成堆積層で，僅かにグライ化が観察される。

D層－明黄褐色シルトを主体とし，粒状の灰黄褐色シルトを微量含む。砂を多く含む水成堆積層で，ややグライ化している。

E層－黒色土を主体とし，粉状のにぶい黄褐色シルトを含む層である。僅かにグライ化している。

F層－にぶい黄橙色シルトを主体とし，粒～小塊状の暗褐色土を少量含む。砂を少量含む水成堆積層である。ややグライ化している。

G層－小塊状の黄褐色シルトを多量に含む黒褐色土。ややグライ化している。

H層－粘性の高いにぶい黄褐色シルトと灰黄色シルトの混合土で，H_1層は粒～小塊状の黒褐色土を少量，H_2層は小塊状の黒色土を含む。ともに砂を含むが，H_2層の方が多い。

壁の状態　検出面から底面までの深さは0.54～1.04mで，上端から中端まで緩やかに落ち，中端から下端に向かって急傾斜で下がる。

底の状態　ほぼ平坦であるが，南に向かって徐々に深くなる。

出土遺物　A・B層を主体として縄文時代晩期の深鉢，台付鉢の破片が出土している（第７図２～11）。その他，H_2層から一部自然面が残存する真岩製の剥片２点が出土している。

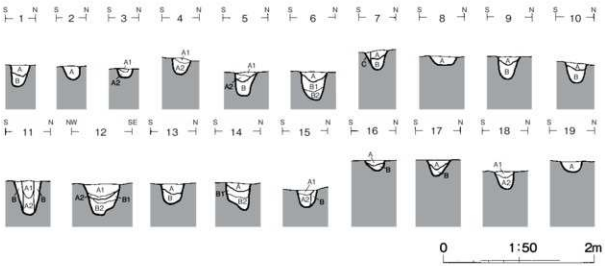
時　　期　古代以降（平安時代）

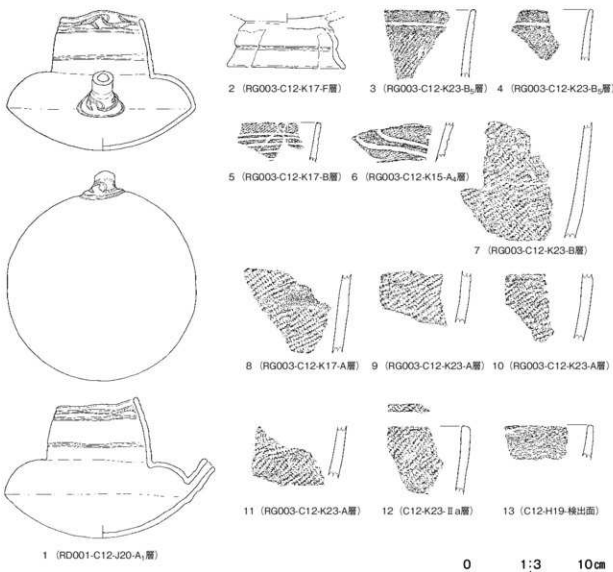
ピット群（第４・７図）

調査区の北と南を除くほぼ全域から19口のピット（Ｐ１～19）が検出されている。検出面はⅢ層上面である。柱痕跡が認められるピットはＰ７・11・15である。ピット群のうち，柱痕跡の確認されたものや深さがあるものについては，掘立柱建物跡などの可能性があるが，並びを明確に把握できなかった。埋土は黒褐色土や暗褐色土が主体となるものが多い。柱痕跡の確認されるピットの掘方埋土は褐色シルトやにぶい黄褐色シルトが主体となる。またピットから出土した遺物はない。

各ピットの規模及び検出面からの深さは以下のとおりである。

Ｐ１－径0.27m，深さ0.29m・Ｐ２－径0.24m，深さ0.17m・Ｐ３－径0.20m，深さ0.10m
Ｐ４－径0.25m，深さ0.22m・Ｐ５－径0.30m，深さ0.31m・Ｐ６－径0.40m，深さ0.36m
Ｐ７－径0.30m，深さ0.25m・Ｐ８－径0.35m，深さ0.11m・Ｐ９－径0.28m，深さ0.28m
Ｐ10－径0.27m，深さ0.25m・Ｐ11－径0.35m，深さ0.45m・Ｐ12－径0.47m，深さ0.40m
Ｐ13－径0.30m，深さ0.25m・Ｐ14－径0.30m，深さ0.35m・Ｐ15－径0.26m，深さ0.22m
Ｐ16－径0.24m，深さ0.15m・Ｐ17－径0.32m，深さ0.20m・Ｐ18－径0.26m，深さ0.23m
Ｐ19－径0.28m，深さ0.14m





第７図　ピット土層断面，RD001土坑，RG003溝跡，遺構外出土遺物

Ⅲ　調査のまとめ

田貝遺跡第16次調査の結果，縄文時代晩期前葉の土坑１基（ＲＤ001），縄文時代の陥し穴状土坑３基（ＲＤ002～004），平安時代の溝跡１条（ＲＧ003），古代以降の土坑１基（ＲＤ005），ピット19口が検出された。

遺構・遺物

縄文時代　縄文時代の土坑群が確認され，検出された遺構は土坑４基である。調査区南で単独で検出されたＲＤ001土坑は，人為堆積で埋められ，完形の注口土器や頁岩製の剥片12点が出土した。土坑の時期は，出土した注口土器から晩期前葉の大洞Ｂ式期に該当する。土坑の用途は埋土の堆積状況，完形の精製土器とともに多数の剥片が底面からその上位にかけて出土していることから，埋納施設もしくは墓壙の可能性が推測される。北に隣接する新堰端遺跡第１次調査区でも，晩期前葉の縄文土器深鉢を倒立状態で埋設した埋設土器遺構が１基確認されており，それとの関連性も考えられる。ＲＤ002～004土坑は，調査区内で一番標高が低くなる東部でまとまって検出された。新堰端遺跡第１次調査区とともに縄文時代の陥し穴状土坑が集中することから縄文時代における狩猟場であったと考えられる。今回検出された陥し穴状土坑の時期については，遺構から出土遺物が確認されないため，正確には断定できない。しかしながら，これまでの市内の発掘調査事例から，縄文時代中期～晩期（約5,000年前～約3,000年前）のものと考えられる。

古代以降　その他の遺構はＲＧ003溝跡１条，ＲＤ005土坑１基，ピット19口であるが，いずれも時代及び時期決定に必要な遺物が出土しておらず，埋土等から古代以降と判断している。調査区を南北に縦走するＲＧ003溝跡は区画溝として機能していたと考えられるが，真北から西に７度傾いて構築され，志波城跡の主軸N6.5°Ｅとは異なり，志波城付属の区画施設とは考えられない。一方，埋土の中位からその下部にかけて一時期に大量の土砂で埋没した水成堆積層（Ｃ・Ｄ層）が認められ，志波城跡外郭西辺の外大溝跡や政庁築地外大溝跡などで確認されている志波城停廃後の大規模洪水層と考えられる。志波城跡外郭西辺での調査事例では，埋土上部に褐色シルトを主体とした厚い水成堆積層（大規模洪水層）があり，黒褐色～暗褐色土の層を挟んで，その下に十和田ａ火山灰（Ｔｏ－ａ，西暦915年降下）と考えられる灰白色火山灰が多く混入する層が確認されている。この大規模洪水層の形成時期は明確ではないが，外郭西辺の外大溝跡などの堆積状況から平安時代後期頃(11世紀前半）と推測されている。ＲＧ003溝跡には十和田ａ火山灰と考えられる灰白色火山灰が堆積しておらず，それ以降の10世紀代に構築されたと推測できる。調査区北東で一部が検出されたＲＤ005土坑は，新堰端遺跡第１次調査の結果から竪穴建物跡や竪穴跡の可能性も考えられる。

ま と め　調査事例の少ない遺跡東部での調査だが，隣接する新堰端遺跡第１次調査の結果と併せて，縄文時代は狩猟場として利用される。溝跡や検出面から出土している縄文時代晩期の遺物に直接繋がる住居跡などの遺構は残念ながら確認できなかった。住居域の検討は今後の調査成果に期待したい。志波城停廃後の10世紀代には何らかの区画溝が構築され，新たな土地利用がされている。また，志波城跡で確認された大規模洪水の浸水範囲が更に南に拡がることが判明した。

写　真　図　版

第16次調査区全景（南東から）

第16次調査区全景（北東から）

第16次調査区及び志波城古代公園遠景（南東から）

RD001土坑　注口土器出土状況（南から）

RD001土坑　遺物出土状況（南西から）

RD001土坑全景（南西から）

RD002土坑全景（南西から）

RD003土坑全景（南西から）

RD004土坑全景（南西から）

RD002・003土坑全景（南西から）

RD002～004土坑全景（南から）

RD005土坑全景（南西から）

第４図版

RG003溝跡全景（南から）

RG003溝跡　土層断面①（南から）

RG003溝跡　土層断面②（南から）

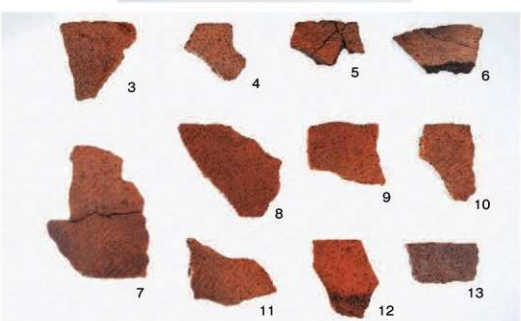
RG003溝跡　土層断面③（北から）

調査風景（南から）

RD001土坑　出土遺物

RD001土坑出土注口土器

RD001土坑出土剥片



RG003溝跡、遺構外出土縄文土器

報告書抄録

ふりがな	たがいいせき
書　名	田貝遺跡
副書名	診療所建設工事に伴う緊急発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ番号	
編著者名	花井正香
編集機関	盛岡市教育委員会　盛岡市遺跡の学び館
所在地	〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地１　電話 019-635-6600　Fax 019-635-6605
発行機関	三浦達雄・盛岡市教育委員会
発行年月日	2017年３月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 世界測地系	東経 世界測地系	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たがいいせき 田貝遺跡 第16次	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 かみかづまたがい 上鹿妻田貝11番１，11番８，11番16，11番17	03201	LE15-2352	39°40′53″	141°06′20″	2016.04.04 ～ 2016.04.26	743㎡	診療所建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田貝遺跡	集落	縄文時代 平安時代 古代以降	土坑　４基 溝跡　１条 土坑　１基 ピット　19口	縄文土器，剥片	

要約	調査事例の少ない遺跡東部の調査結果から縄文時代は狩猟場として利用され，志波城廃絶後の10世紀代には区画溝が構築される。この区画溝には，志波城外郭西辺などで確認されている大規模洪水層が堆積し，大規模洪水による浸水範囲が更に南に拡大する証拠となった。

田　貝　遺　跡

―診療所建設工事に伴う緊急発掘調査報告書―

2017年３月17日　発行

編集　盛岡市教育委員会　盛岡市遺跡の学び館

〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1

電話 019-635-6600　Fax 019-635-6605

発行　三浦達雄　盛岡市教育委員会

印刷　河北印刷株式会社

〒020-0015　岩手県盛岡市本町通２丁目８－７

電話 019-623-4256　Fax 019-623-0976